

## 図書館.....

脳神経外科学講座 廣畑 優

医学図書館ニュースから **Special Essay** の原稿依頼をいただいた。バックナンバーを拝読させていただくと執筆者の先生がたが教養あふれるエッセイをお書きになっておられます。さて僕も何か！と思いましたが、僕は小学校から大学卒業までほとんど図書館（図書室）に行った記憶がありません。生徒、学生の図書館の使いかたは小説を借りて読む、静かに自習するなどであろうと思いますがそんなことをする人間ではありませんでした。高校3年間などは図書室に入ったことが一度もないと断言できます。つまりこのエッセイを担当する資格がないと言える人間です。

医者になってから医学図書館には文献検索に通いました。過去の論文を紐解く必要がある場合には、その雑誌が脳外科医局の図書室にあればコピーして終わりですが、ない場合は図書館で購入雑誌の目録本を探してお目当ての雑誌がリストにあれば図書館に走り、非常階段のような金属の狭くて急な階段を上ってコピーをしました。目録で購読中になっても目的の文献は購読開始より前の号であったりすると落胆が大きかったことを覚えております。

図書館のありがたみを痛感したのは留学中（1995-96 New York University）です。基礎研究をしておりましたが、ラボミーティングで理解できないことが多々ありました。その時は知っているようなふりをして図書館に走り PC で MEDLINE を検索して必要最小限の知識を得て何事もなかったような顔をして事なきを得る（得てなかったかもしれません）ということを繰り返していた気がします。そもそも MEDLINE の存在を知ったのもこの時でした。NYU 本学（ワシントンスクエア）の図書館は世界的に有名ですが、医学部の図書館も非常に充実しておりました。探した論文の中に NYU で購読していない雑誌はほとんどありませんでした。また閲覧席が非常に多く医学部の学生が深夜まで勉強している姿が印象的でした。

現在は図書館のホームページから PubMed に入れますので、また図書館に行くことはなくなりました。図書（紙媒体）の収集、保管と閲覧が図書館の役割とすればその重要性は少なくなってきたと思いますが、学生などが勉強する雰囲気のあるスペースを提供することは医学部としては大切な場所であると考えます。